

新しい詩の声 2019・作品

〔最優秀賞〕

伊藤 凧菜

最果ての漁師

多年の重いタバコで傷んだ肺

すっかりものの嫁さんみつつけねば

除雪もせん、仕掛けもあるのをちびと直すだけ

量は獲れても海を分かっちゃいねえ

俺がいなくなったらどうするつもりだ

ひび割れた手でカラカラの咳を抑える

そのくせ口だけは一丁前で

よそは良いだとか、自分が全てと思いががる

側面しか見ちゃいねえんだ

おらいの頃は暇さえあれば海を見たつてもんだ

積年のヤマセに晒され傷んだ肺

めんこな二匹の猫たちよ

軋んだ骨を震わす声、どこぞのどら猫と交尾む声

みたかねえし ききたかねえぞ

なにもここでなくたっていいじゃあないか

ヒユヒユウと真空の宙を切る

まいっちまったよ

それでもかえって来たのが嬉しんだよ

けれどももっとしっかりしてくれよ

せせら笑いも不気味に煤けたダンボール

買い溜め一本120円の

ああ、その一本120円の缶コーヒーを

お前と一緒に飲む時間こそ

骨の浮きでる腰を丸め、そつとなでる作業場の夜

〔最優秀賞〕

中田 野絵美

窓の外の反逆

藍色の夜は滴って鋭いままで降りそそぐ。その滴りの陰湿な味を知っている人々がついに反逆に至ったとき、「私たちは裏切られたのだ！」と叫ぶ藍色の支配階級の焦燥の声は幾つも重なりあつてオモチャみたいな街に響いた。与えられた何かの可愛らしい銀紙を剥けば、中身はむごい暴力だったこと。優しさを望めば罪だと突き飛ばされて、ひどく擦りむいた膝を震えながら抱いていたこと。冷めたドアの前で声を殺して泣いたこと。反逆する人々は互いに共鳴して今夜を塗り替えていく。私はその激しい輝きを家賃四万円の女性専用アパートの出窓から見つめていた。そして彼らと支配階級との攻防を君は遠い景色として嘲笑いながらあつたかいお茶を啜っている。私は君の笑い声にためらいの響きを探すけれど、見つけられずに絶望する。私が空虚な取り繕いの感想で君を傷つけてしまったあのやたらと麗らかな春の日、無邪気で

いいねって君は言った。でも傷つかなかったために傷つけることをまるで他人事だと思っているのだとしたら君はほんと無邪気だ。人間らしい驕りだと私は思う。あの日苛立った君は君の足元に咲くたんぽぽを迷わず踏みつけていたつけ。呪いのない愛なんかなくて、それでも自分で自分の棘にサンドペーパーをかけて、少しでも丸くして、そうやって生きていくしかない。君は決して私ではないのに、呼吸するかのようにさりげなく私の言語を乗っ取るうとする。それが君の棘だ。いまの君は反逆者にもなれるし支配階級にだってなれるさ。この部屋を出たら君は一体どちらになるのだろう。ふと見ると君のキャラクター物のマグカップからお茶はすっかり飲み干されて、自分の棘に気づかない君が鋭いままで私の傍らにやってくる。君と私のワンピースが生乾きで揺らめく。君が君の愛を正しさと呼ぶ夜、窓の外では反逆が輝きつづけた。

〈優秀賞〉

加勢 健一

うその花束

お花屋さんにきれいな花が売っていました

ニッコリウム、ヌクモリア、ダンランソウ

全部うその花だけれど

かわいいつぼみをえらんで花束にしてもらいました

家に帰ったらわたしの小さな窓にかざります

お父さんお母さんが戻ってきたら

この花束をりょうしんにささげるのです

こんなもの嫌いだ、とお父さんにぶたれました

ぶたれて痛いのはわたしが悪いから

今日もがまんしなければいけません

窓の外からうその花はとでもしあわせに見えるそうです

ときどき中をのぞいて心配してくれる人もいるけれど

そのときだけお父さんは花がすきなふりをします

わたしの家には玄関がふたつあって

夜にお父さんが内がわの入り口から入ってくるとき

お母さんは外がわの出口を出ていって朝まで帰りません

くらい月のなみだがおちて

花びらは何度もちりました

本当はお父さんもお母さんも大きらい

だけどわたしはりょうしんを信じて

ずつといっしょにいたかった

いいえ。それも全部うそ

窓にかざり続けた花がかれるとき

わたしはわたしのりょうしんにカギをかけて

この家を出ていくつもりです

〈優秀賞〉

君嶋 復活祭

君が人間じゃなければよかった

君が人間じゃなければよかった

遠い星の王位継承者だったらよかった

僕は君をローマの休日みたいに連れ出して

地球も悪いものじゃないでしょうお姫様と

夜の海 星が一番綺麗に見える時間を 君に教えた

ヴェスバの後ろに君をのせて これから海に行こうと言

うと

君は寒いよと嫌がった 家にいようよと断った

君が人間じゃなければよかった

遠い銀河の向こうのその国では

王族は炎のドレスを身に纏っていて

生まれてから凍えたことが一度もない代わりに

誰かに抱きしめてもらえたこともないんだ

だけどヘッドライトなんて必要ないくらいに

夜道を明るく照らせるからさ 問題ないよと僕は言うん

だ

そして夜の海 星が一番綺麗に見える時間を

僕は知っている 君が人間じゃなければよかった

そしたらこんな喧嘩をすることもなしに

僕たちお互いが好きという感情以外が全て死滅した

幸せの絶頂のときに君の迎えの馬車が 遠い星からやっ

てきて

君の涙が炎のドレスに 落ちてじゅじゅつと

音を立てるんだ 僕はそれを見て思うんだ

あの日見た空の星が全て この地上に落ちてきてしまえ

ばいばいのに

僕は君を初めて抱きしめて 家にいようよと誘うんだ

スイッチを押せばいつでも ぴかぴかの蛍光灯

ハロゲンヒーターのスイッチ 僕たちの 家にいようよ

受賞のことば・受賞者略歴

●最優秀賞

伊藤 凧菜

〈受賞の言葉〉

嬉しいお知らせありがとうございます。『言葉
を紡ぐ人になりたい』理想と現実の相違に落ち込
む私が詩の募集を知ったのはメ切的数日前でした。
自分の表現を誰かに見てもらうのは初めてで、何
をどう書けば良いか悩んでいると浜の作業場に橙
色の灯。不器用ながらも心温かい漁師の姿が。走
って家に帰り、勢いそのまま速達で送ったものが
本作です。この度の受賞を励みに、今後何らか
の形で日本最北の地より言葉を紡いでいきたいで
す。

〈略歴〉

1995年8月18日、北海道稚内市生まれ。高校
卒業後、地元金融機関に就職。現在は結婚を機に
利尻島へ移住。島内の小学校で特別支援員として
勤務。

●最優秀賞

中田 野絵美

〈受賞の言葉〉

2018年、#metooの沸き起る中で私はこ
の詩のアイデアを得ました。これは旧弊なフェミ
ニズムが殺してきた女性たちと、私たち若者が担
うべき新しいフェミニズムに思いをはせながら書
いたものです。私はかつてフェミニズムに心を擦
り減らし、一時は極度のアンチフェミニストにな
りました。その後再びフェミニズムを愛せるよう
になるまでの時間の流れ、その痛みがここに表れ
ています。作中の二人の人物はどちらも私です。

〈略歴〉

2000年、山口市生まれ。平成三十一年四月放
送大学に入学。

●優秀賞

加勢 健一

〈受賞の言葉〉

このたびは栄えある賞を頂戴し、心より感謝申し

上げます。散文とは異なった詩のかたちを日々、模索しておりますが、それと同時に、日常の出来事はもちろん、夢や妄想など非現実的な事柄をとらえて表現しようとも試みています。また、コミュニケーションの道具として酷使され疲弊した言葉を解き放ち、芸術的観点から再構築することも、詩人の使命ではないかと考えています。今後ともご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

〈略歴〉

1978年、北海道生まれ。18歳で上京し、早稲田大学大学院文学研究科修了。専攻は日本語学、レトリック、表現論など。現在は新聞社の校閲部門で記事の点検などに当たっている。2012年から鎌倉在住。趣味は味噌や梅干し造り、自然散策、ドライブ、カラオケほか。左党。

●優秀賞

君嶋 復活祭

〈受賞の言葉〉

これは、何だろう。太宰治が『女性徒』で書いた

ような「一夜おくれて来る」幸福だろうか。学生の頃は、専ら自分が救われたくて書いていました。「おめでとう」と祝われるような幸福が欲しくて書いていました。卒業した後も、書いていました。ただひたすら、書いていました。「幸福は一生、来ないのだ。それは、わかってる」そんな気持ちで、だから、これからも書き続けるのだと思います。このたびは誠にありがとうございます。

〈略歴〉

二〇一八年神戸市外国語大学卒。在学中に劇作と出会う。学内の劇団にて、マーガレット・エドソンやテネシー・ウィリアムズ作品の演出を担当した後、自身で執筆した三作を多言語劇として上演。同時期に劇作家の北村想に師事し、想流私塾第二十期生公演にて、『君よわが恋踏むからは柔らかにこそは踏みたまへ』を発表（演出・横山拓也）。卒業後は都内で企業の営業職に従事しつつ、詩作や同人小説の執筆を続ける。

作品募集と選考の概要

天野 英

日本詩人クラブは、昨年度の実績を受けて今回も第3回「新しい詩の声」の継続実施を行った。

この活動は、日本全国の幅広い方々と作品公募を通して日本に於ける詩文化の普及と発展に寄与したいという意志と希望により行うものである。作品募集は日本詩人クラブの会員ではない人を対象として行い（会友の応募は可としている。）応募作品の中から優秀賞を4ないし5篇を選考の上決定する。選考で選ばれた作者には優秀賞としての賞状・賞金が授与される。作品公募と受賞式までの一連の内容と経緯は、詩界通信と日本詩人クラブのホームページに掲載される。

第3回「新しい詩の声」に応募された方は、126人（内1名が辞退）。応募者は、北は北海道、南は沖縄県までの幅広い地域からの応募であった。男女別では男性60人。女性65人。応募された方の年齢を見ると14歳から78歳までとなっており、14

歳という若年者の投稿には驚いたが、10歳代の投稿者数が18名あったことと、それら若い世代の参加者が、詩の表現を心得た作品を書かれていることにも感心させられ、この事業の計画実行のメンバーとしての喜びも共有させて戴いた。

優秀賞受賞者には、今後受賞式の日取りが決定される。参加者全員に対して、寸評の通知をすることと、「フォローアップセミナー」も計画している。

選考経過報告

原 詩夏至

第3回「新しい詩の声」選考会が2018年4月24日(水)午後2時より開かれた。選考委員は天野英・石下典子・佐相憲一・曾我貢誠・谷口典子・長尾雅樹・原詩夏至の7名。応募作全126篇のうち作者より取り消しのあった1篇を除く125篇の中から各委員が最終選考候補作を5篇ずつ持ち寄った。選ばれたのは次の28篇だった——あおい満月「森のなみだ」、蒼樹ほのお「病を負うということは」、

青山勇樹「華やかな逡巡」、網野秋「ひと時の思
春期返り」、謝野真結「ひひる」、家端とも女「ひ
とつ成層圏の下」、伊藤風菜「最果ての漁師」、岡
田美幸「言葉の泉」、忍野木菟「ミミズクの空」、
賀賀ひかる「月が恋しくなる理由」、柏井萌美「彼
女のソネット」、加勢健一「うその花束」、君嶋復
活祭「君が人間じゃなければよかった」、桐木平
十詩子「飛ぶ魂」、黒川隆介「他人」、坂木昌子「し
ばり」、笹村ようこ「窓の外のトナカイ」、白雪「さ
くら」、田中知織「終末沼」、灯火ほたる「みえな
い友だち」、戸田和樹「幕切れ」、中嶋規美子「秋
の夜は」、中田野絵美「窓の外の叛逆」、南雲和代「生
き延びよ」、久下まつ子「to meet me」、睦月夏「太
陽」、杠ゼン「水子」、渡辺彰「その景色において」(敬
称略・50音順。以下同じ)。この時点で尚、最年
少14歳・最年長76歳、男性8名・女性20名という
多彩な顔ぶれであり、テーマも思春期の鋭い自意
識から老境の感慨、恋愛や四季の移ろいから深刻
な社会問題までと幅広く、そこから先の選考は難
航を極めたがまた手応えも大きかった。各委員は

まず自分の選んだ5篇について推挙の弁を述べた
後、この28篇の中から投票により更に各3篇の推
薦作を選んだ。そして1票以上を獲得した13篇の
中から、まず2名以上の支持を得た4篇、及び残
りの9篇から再投票によって選んだ4篇、計8篇
に最優秀賞及び優秀賞の候補を絞り込んだ。伊藤
風菜、賀賀ひかる、加勢健一、君嶋復活祭、笹村
ようこ、中田野絵美、久下まつ子、杠ゼンの各氏だ。
委員はこれらの詩をまず朗読を通して耳で吟味し
た。そして一人ずつ各篇についてその長所と問題
点を述べ合った。その結果「優秀賞以上確定」と
して最後に残ったのが伊藤、加勢、君嶋、中田の
4氏の作だったが、そのうちどれを最優秀賞とす
るかについては最後まで意見が分かれた。白熱し
た議論の末、辛うじて伊藤・中田両氏を残し決選
投票を行ったが、結果は伊藤氏支持と中田氏支持
が各2票、「甲乙つけがたし」が3票。これらも
う「天の声」だった。委員会は両氏の最優秀賞同
時受賞を決定した。

伊藤風菜「最果ての漁師」。老いた漁師の元に

息子が帰ってきた。しかしさっぱり頼りにならない。それでも帰ってくれたことの嬉しさ。そんな親心が独白調で丹念に綴られる。その温かくも確かな視線。

中田野絵美「窓の外の反逆」。窓の外で繰り広げられる「支配階級」と「反逆者」の闘い。一方、室内でもそれを巡る「君」と「私」の葛藤が。火花を散らす潔癖な感受性。その痛ましくも若々しい立ち姿。

加勢健一「うその花束」。子供の目線で綴る親からの虐待。一見童話調の語り口に深い悲しみが滲む。

君嶋復活祭「君が人間じゃなければよかった」。些細なことから恋人と喧嘩してしまった「僕」のやり場のない切なさが幻視させる「遠い星の王位継承者」としての「君」。その圧倒的な熱量が魅力だった。

選考委員

天野英・石下典子・佐相憲一・曾我貢誠
谷口典子・長尾雅樹・原詩夏至